『梅光言語文化研究』第５号（2014年）pp. 63・75
@2014年　梅光学院大学国際言語文化学会

Henry James と Isabella Stewart Gardner

—その時代性を探る—

堤　　千佳子

Henry James has a wide range of acquaintances, including famous writers, artists, and wealthy people on both sides of the Atlantic. Among them is Isabella Stewart Gardner, who is such a wealthy woman that she founds a museum of her large art collections in Boston. James and Gardner have a long-standing friendship, both in the United States and Europe, especially in Venice. They affect each other in many fields. He introduces J. S. Sargent, who is famous for her portrait, and she inspires James in building up the background of his works and some characters in his works. James creates some characters suggestive of her.

This paper explores how James and Gardner affect each other and demonstrates how his works are affected by the burgeoning consumer culture of the late 19th century and the early 20th century, focusing on *The Wings of the Dove*. In verifying the modernity of his work, Veblen's "conspicuous consumption" in *The Theory of Leisure Class* is used as the key viewpoint.

キーワード　Henry James　Isabella Stewart Gardner　顕示的消費　ヴェニス　modernity

序　論

Henry James の周囲には華麗なる人間関係が存在する。大西洋の両岸で、またヨーロッパにおいても、イギリスとヨーロッパ大陸の両方で、特に文学や芸術という分野で活躍した人物たちや実業家との交流については枚挙の暇がないほどである。そのような交流の中から、James は Hawthorne や Maupassant などについて非常に優れた作

家論を著している。同時代を生きたIsabella Stewart Gardnerとも故郷アメリカで、イギリスで、パリで、ヴェニスにおいて交流を深め、その作品の背景、登場人物の造形にインスピレーションを受けた。また彼女の有名な肖像画を制作した画家のJ. S. Sargentを紹介することで芸術に関して彼女に影響を与えるなど、相互の関わりを看過することは出来ない。二人の結びつきの証拠として、1879年から1914年の長きにわたって二人の交わした手紙の一部はIsabella Stewart Gardner Museumの机の中にまだ収められている。

彼女とJames自身、彼の作品との関わりについては様々な作品の中で見ることができる。ヨーロッパにおけるアメリカ人同士の交流など、彼女にインスピレーションを受けたことが多々あるのは明らかである。特徴的なのは、アメリカ女性を主人公とする作品の中に彼女の片鱗を見て取れることである。ボストンの“genteel tradition”を重視する保守的な社交界から、そのパリで作られた衣装とニューヨーク出身の彼女の振る舞いによって冷遇されたことなどは“Daisy Miller”のヒロインを想起させる。彼女の美術品の収集熱については*The Golden Bowl*のAdam Ververや*The Spoils of Poynton*のAdela Gerethとの関連性が見える。そこにはアメリカの富がヨーロッパの遺産、特に美術品を収集することで、旧世界を席巻する構造を見て取れる。特に注目すべきは*The Portrait of a Lady*及び*The Wings of the Dove*である。前者においては主人公の名前や人物造詣について彼女との類似性があるのは明らかであり、後者においては主人公Milly Thealeの富と精神性を象徴する真珠のネックレスはIsabella Stewart Gardnerのトレードマークとされたものを彷彿とさせ、Jamesも滞在した彼女のヴェニスの別荘、Palazzo BarbaroはMillyの滞在したPalazzo Leporelliのモデルとなっている。

本稿ではJamesとIsabella Stewart Gardnerの交流や、彼女とJamesの作品の登場人物との類似性の検証にとどまらず、Veblenの*The Theory of the Leisure Class*において提示された顕示的消費文化が台頭する中、modernityと言う観点から、主にJamesの作品のヒロインのとらえられ方、*The Wings of the Dove*におけるヴェニスや美術品との関わりを検証し、その時代性について論考していきたい。

I James と Gardner の接点

I－1 Isabella Stewart Gardner と Henry James

Isabella Stewart Gardner は1840年ニューヨークシティに生まれた。James よりも3歳年長である。パリで教育を受け、父親とイタリアを訪れ、学友の財産家の兄 John Lowell (Jack) Gardner と1860年結婚。ボストンに居を構える。のちに Mrs. Jack と称されるようになる。1898年の夫の死後、蒐集したものを収容するための美術館、Isabella Stewart Gardner Museum を1899年から1901年の2年間をかけて建築する。そこには Teziano や Fra'Angelico、Rembrandt、盗難に遭って現在も行方不明のままの Vermeer の作品などが収蔵されていた。アメリカでは個人のコレクションをもとにした美術館はいくつもある。設立の時期については Isabella Stewart Gardner Museum よりもかなり時代は後になるが、代表的な美術館としてワシントン・D.C. の The Phillips Collection やマサチューセッツ州ウィリアムズ・タウンの The Clark Art Institute などが挙げられる。彼女の美術館も前述の二つの美術館に比べて、規模としても、コレクションの内容からしても非常に優れたものである。

James とは Charles Elliot Norton 夫妻を通じて1879年までには知り合っていたとされている。ロンドンやパリでも交遊を重ね、1892年7月には、Gardner 夫妻の招待を受け、3週間ヴェニスの Palazzo Barbaro に滞在する。1899年イギリス、ライの Lamb House で、1907年 London で、兄、William James の死後、1911年 New England で最後に会ったことが記録されている。

James は Gardner の富、行動力には感心し、彼女を "innocent and unduly sympathetic" であるとみなしていた。James が彼女に送った100通を超える手紙は今も Fenway Court の私的な机の中に現存する。

I－2 ヴェニスとの関わり

Isabella Stewart Gardner は美術品の蒐集と共に、旅行を愛し、ヨーロッパ、中近東、そして日本に至るまで幅広く旅行をし、ヨーロッパおよびオリエンタルの美術品を収集した。彼女が特に愛したのはヴェニスである。Gardner 夫妻がヴェニスを訪れたのは1884年5月13日、オリエントへの旅の終わりの時だった。彼女の目には ヴェニスは "a dream city" と映った。

On May 12, 1884, the trip to the Orient had ended. The Gardners were

aboard ship, the sea was like oil., there were yellow and red sails and Venice was "afar off, looking like a city in a dream." ...Isabella Gardner had just arrived at the city that was to capture her heart, to give new direction to her life, and to call her back year after year. (Mrs. Jack, 101)

ヴェニスについて、James と Gardner の関わりを探っていくうえで看過できないのは、*The Wings of the Dove* の中で主人公 Milly Theale が借りる Palazzo Leporelli のモデルとされる Palazzo Barbaro の存在である。Palazzo Barbaro はヴェニスのグランド・キャナル近くにあるゴシック様式の宮殿で、1457年から1858年まで Barbaro 一族によって所有されていた。アメリカの富豪　Curtis 夫妻が1881年にこの宮殿を借り、その後1885年に購入するまでに、次々と人手に渡り、その宝とも言える芸術品の一部が手放されていった。Curtis 夫妻はやがて手放されていた作品を買い戻し、過去の栄光を再現した。Gardner は実際に Palazzo Barbaro を借り受けて夏を過ごしており、James 自身1892年の７月３週間滞在している。この宮殿を彼女がどのように享受したのかは次のように描かれている。

It was lady's pleasure, for the second summer in succession, to occupy, which she had rented from the Curtises, and to create within the "court" with which she liked to surround herself.
...and the Queen Isabella's game of modern life carried on within the frame of the past. (Life p.379)

二夏続けて Curtis 家からこの家を借り、自分の周りに宮廷を作り上げることは彼女にとって喜びであった。女王のような Isabella の現代的な生活というゲームは、過去という枠組みの中で行われていたと考えられる。先に述べたように Gardner はこの宮殿をモデルとして自らのコレクションを収蔵するため、Isabella Stewart Gardner Museum を設立したが、この美術館は Fenway Court とも呼ばれていた。すなわち、Queen や Donna と呼ばれていた彼女の性格や行動様式の一端が随所に現れている。James は彼女の美術館についてつぎのように評している。

In *The American Scene*, his look at his native country, published in 1907, James attempted to place Isabella's new museum within the Bostonian as

well as American tradition of the arts. He applauded the "rare exhibition of the living spirits lately achieved, in the interest of the fine arts, and of all that is noblest in them, by the unaided and quite heroic genius of a private citizen" (Letters. 37)

II James 作品・登場人物に見られる Gardner 的要素

II－1 作中人物と Gardner

James の作品の置かれている環境や登場人物には Gardner の生活環境や個性を思い起こさせる描写が多くみられる。特に顕著なのは *The Wings of the Dove* であるが、その他の作品にも彼女の影響が数多くみられる。

Mrs. Gardner, often judged in the Boston newspapers and in more conservative society as an eccentric figure — which she probably enjoyed being — letting all sorts of 'legends' grow around her, was surrounded by a 'court' of musicians, painters novelists, who revered and flattered her. (John Singer Sargent caught the aura of her great power in his famous portrait of 1888, where Mrs. Gardner, in a long black dress by the famous Paris couturier Worth, is shown exhibiting the signs of her wealth — she wears the purest pearls around her neck and waist, rubies attached to the pearls, and rubies glitter also on her black silk slippers. The motif of the golden background seems to crown her within a sort of holy nimbus, symbol of power, while her beautiful white neck and arms underline her feminine attractiveness. In another famous portrait, of 1894, the Swedish painter Andres Zorn caught her extraordinary vitality, painting her as she stepped into the salon of the Palazzo Barbaro, the magnificent Venetian palace which Mrs. Gardner rented more than once from its owners, Daniel and Adriana Curtis, while the moonlight shines in the background over the Grand Canal, and her open arms and hands are reflected in the window panes. The Venetian setting is highly significant, as the Barbaro was certainly an important inspiration for Isabella's Fenway Court — her lasting creation — where the

simple exterior of the building hides a Venetian courtyard, where the Gothic windows, partly original ones, look out into a space rich in Roman mosaics, sculptures, statues, and flowers.) (Letters, 9)(以降下線部は筆者による)

"Daisy Miller" については主人公 Daisy の性格や衣装について類似点がみられる。ここではまず Gardner の振る舞いについて、ボストンの "genteel tradition" の基準からすれば "eccentric" とも批判されている。これは Daisy の他人の意見を聞かず、あくまでも自分の思いを通そうとする傍若無人な振る舞いとも共通している。ドレスについては、Gardner はパリの Worth のものも好んで着用し、センセーションを起こしたとされている。Worth はドレスつくりをパリで大きなビジネスとした最初のデザイナーであった。クリノリンをはずすことで、脚の動きが従来よりも鮮明になり、因習的な周囲から顰蹙を買ったとされている一方で、彼女よりも若い世代が追随したことで、年配層からはより批判的な目で見られることとなった。彼女の議論を巻き起こすような性格はニューヨークとボストンの社交界の相違を体現したものと考えられる。ニューヨーク生まれの Gardner がボストンの "genteel tradition" の中では型破りなものと映ったことは想像するに難くない。Daisy との共通点としてはその挑戦的・挑発的性格と共に、ドレスの多くがパリ製であったことが挙げられる。このパリ製のドレスはある種の記号であり、Daisy にとっては父親の富の象徴、Gardner にとっても富の象徴であり、自分の考えを押し通そうとする彼女の性格を表すものであった。"legend" とまで言われる彼女についてのエピソードを取り上げる。

The masculine comment which was attributed to Tom Appleton was repeated for years until it became one of the "Mrs. Jack" legends. Bell was arriving late at a party and coming up the stairs as Appleton descended, the story went. "Pray, who undressed you!" Boston's famous wit was moved to remark. "Worth," said Mrs. Jack. "Didn't he do it well?" (Tharp, 43)

One matron said that it was all right to buy clothes in Paris but that she, personally, always put hers away for at least a year after she got home — so as "not to be conspicuous." (43)

またアメリカ人富豪によるパリ製のドレスの購入は、アメリカの経済力の向上とともに、ヨーロッパの消費財を含めた文化へのアメリカの侵入をも表象している。

前記の引用の中から、他にも James 作品との関連が見て取れる。*The Portrait of a Lady* の主人公 Isabel Archer は、その名前にも共通項があるが、性格造詣は Gardner に負うところが大いにあるとされる。彼女の美術品蒐集への情熱は *The Spoils of Poynton* の Adela Gereth や *The Golden Bowl* の Adam Verver といった人物の造詣に影響を与えている。1899年に彼女が Holbein の作品を購入したことは "The Beldonald Holbein" を書くことにインスピレーションを与えたと思われる。*The Ambassadors* の Marie de Vionnet と Mrs. Gardner は Shakespeare の Cleopatra を思い起こさせるとしている。何よりも *The Wings of the Dove* の Milly Theale は James の従妹 Minnie Temple を想起させることは周知の事実であるが、ヴェニスでの palazzo における滞在、圧倒的な富の力、真珠のネックレスは Gardner との共通点を看過することは不可能である。Gardner のトレードマークともいえる真珠の首飾りは Milly が身に着け、Kate の嫉妬や欲望をかき立てたものを想起させる。彼女が借りた宮殿もまた Milly の借りた宮殿を連想させるものである。

ただ James は彼女を全面的にモデルにしているというわけではなく、たとえば前述の *The Wings of the Dove* については、若くして亡くなった彼の従妹 Minnie Temple の要素が多く使われている。また、前述したように James は Gardner に追随していたわけではなく、一定の距離感を置き、客観的な視線を向けていた。次の引用はその点をよく示唆している。

> James's affection and esteem for Mrs. Gardner are sincere and intense and become stronger and stronger as the years go by; the novelist recognizes openly Mrs Gardner's vitality and power but he does not obey possibly 'orders,' even if this can be seen as a lack of faithfulness in their friendship: what is most important for James, in spite of his, at times, hectic social life, is the possibility of having time to devote to his writing, the real 'felicity' of his life. (*Letters*. 11)

II－2　James の作品と「顕示的消費」について

The Portrait of a Lady において Isabel と Osmond との結婚を画策した Madam

Merle、彼女にとって "self"（「自己」）とは「家や家具や衣装や読む本、付き合う仲間」などの "appurtenance"（「付属品」）から成り立つという唯物的価値観を披露する。また衣服などの外的な要素も自分を表現するものであるというのも、顕示的消費の一端を表している。

> When you've lived as long as I you'll see that every human being has his shell and that you must take into account. ... we're each of us made up of some cluster of appurtenances. ... One's self — for other people — is one's expression of one's self; and one's house, one's furniture, one's garments, the books one reads, the company one keeps — these things are all expressive." (287)

彼女のこの考え方も、Kate の Milly の真珠のネックレスに対する見方も、Veblen の顕示的消費の観点からすると次のように解釈できる。

> The superior gratification derived from the use and contemplation of costly and supposedly beautiful products is, commonly, in great measure a gratification of our sense of costliness masquerading under the name of beauty. Our higher appreciation of the superior article is an appreciation of its superior honorific character, much more frequently than it is an unsophisticated appreciation of its beauty. ... It frequently happens that an article which serves the honorific purpose of conspicuous waste is at the same time a beautiful object; … (86)

単に欲望や嫉妬を掻き立てるものではなく、modernity の観点からしても美そのものと美が象徴する富との関係がこの真珠の首飾りによって表象されている。

> There is a recall of Mrs. Gardner and her famous string of pearls in the scene in which Kate studies Milly's pearls, "the long priceless chain, wound twice round the neck, hung, heavy and pure, down the front of the wearer's breast," and recognizes that the weak dove has the strength of her wealth, Densher, listening, knows that for Kate Milly's wealth was "a power, a great

power," and was "dove-like only so far as one remembered that doves have wings and wondrous flights, have them as well as tender tints and soft so unds." (*Life*. 552)

*Life*の中で Kate が Milly の真珠をじっくり観察している場面で Mrs. Gardner の有名な真珠の首飾りを想起することが書かれている。 "Milly's royal ornament" (「王女にふさわしいミリーの首飾り」) (WD 219) とケイトがみなした真珠の首飾りは彼女にとっては "the character of a symbol of difference" (「自分とミリーの隔たりの象徴」) (219) と映った。Milly の真珠は彼女の富を象徴し、その富とは Kate にとっては大きな力を意味していた。その力は Kate の欲望を刺激する一方で、彼女自身からも、Densher からも受け取ることはできないものであった。Milly が身に着けていた "the long, priceless chain, wound twice round the neck, hung, heavy and pure, down the front of the wearer's neck" (217) は Sargent の描いた肖像画で Gardner が身に着けていた首飾りと一致する。また McCauley はその著書 *Gondola Days* で次のように書いている。

> Mrs. Gardner's famous pearls, bought in Paris every year by her husband, portrayed in their luminous beauty by Sargent and Zorn, celebrated in a letter of Mrs. Bronson to Mrs. Jack, become part of the symbolic field that defines Milly Theale's innocence and power at the same time. Milly is a "bejewelled dove," an oxymoron, where helplessness and power, flowing from extreme wealth, go together. In the rich interior of the Palazzo Leporellli, Milly Theale reigns like a most wealthy Mrs. Gardner and like a bejewelled Veronese lady; ... (147)

Veblen の解釈によると、真珠とは美しさよりも "higher appreciation of the superior article" (「卓越した財に対する高い評価」) (86) であり、"Dress as an expression of the pecuniary culture" (「金銭的な文化の表象としての衣装」) (111) の一種であるといえる。身に着けるものは衣装や装飾物を含め、すべて装着者本人と同時に、所有者の環境、特に経済的な状況を示すものである。Gardner のトレードマークともいえる真珠の首飾りにしても、彼女や彼女の夫の富の力を示している。夫が彼女の有名な真珠の首飾りの最初の物を4500ドルで購入した記録が残っている。そのほかにも彼

女自身もパリにおいて13,056ドルで真珠のネックレスを購入している。

"Daisy Miller" の場合とは異なり、Milly の衣装についての贅沢さについてはとくに言及されていない。ただ材質などでその高級感を感じさせ、またその色によって、彼女がどのように裕福になっているのかが暗示されている。彼女は当初、黒のドレスを着用している。遺産相続によって財産の入手したことがうかがわれる。また最後の Densher との面会では彼女はそれまでの黒いドレスを脱ぎ、白いドレスを着用している。それは現状からの脱却と鳩のイメージの強化に役立っている。

一方で、Milly の借りている Palazzo Leporelli もまた彼女の富の力を見せつけている。James はこの宮殿を単なる過去の栄光や歴史を象徴するものとして扱うだけでなく、一種の理想的美術館として設定している。悪天候に見舞われてこの宮殿に滞在せざるを得なくなった Densher が、ここで過ごす日々を美術館で過ごす時間と比喩している箇所から想定できる。これは Gardner が自分のコレクションを収めるためにボストンに美術館を建設したことにつながっている。このほかにも James は作品中で美術品についての言及を多くしている。Milly についても Bronzino の『ルクレツィア・パンチャティキの肖像』との類似が作品中で重要性を持って描写されている。そのほかにも Veronese の『カナの婚礼』についても言及されている。前述したように、James の登場人物の中には自らのコレクションを故国アメリカで美術館を設立し、収蔵しようとしている人物もいる。但し *The Golden Bowl* の Adam Verver は美術品だけでなく、身近な人間についてもその美術品的価値、すなわち美しさや、周囲の人間とのかかわりを持たせる社交的才能を評価し、持ち駒として活用している。つまり個人の商品化が行われているのである。

作品の主な舞台であるヴェニスはかつての金融の中心地で、古い資本主義の土地柄である。この作品ではヴェニスは過去や過去の栄光、ロマンスを象徴している。Palazzo Leporelli はかつての栄光の遺跡であり、この時点では「金」（それもアメリカンマネー）によって貸し出される不動産をなっている。これは Milly の財産を顕示している。彼女が残りの生の充実を願い、それを叶えるために必要な conspicuous leisure, conspicuous consumption を表している。この宮殿を借り、維持していくためにはそれなりの出費が必要となるが、Milly の "wealth" はそれでは揺らぐことのないものとして表現されている。ヴェニスの場面から登場してくる Eugenio はこの仲介者であり、Milly の意に沿うように手はずを整えてくれるが、彼は Milly の財産に関して残余受贈者としての自分の存在を主張することにためらいを持っていない。ここでは Milly と彼との契約関係、またお互いの受益者であるという交換経済の関係が成立して

いる。Palazzo Barbaro でも執事やコック、非常にハンサムなゴンドラの漕ぎ手などもこの屋敷の大いなる魅力を高めていたとされている。ここにも Gardner の富の力・アメリカンマネーの強さが表れている。

結論
— modernity の観点からみる James 作品 —

modernity をキーワードとして、James 作品をどのように解釈することができるだろうか。Christopher Butler は modernity の定義を次のようにしている。"... the rise of our dependence on science and technology, the expansion of markets and commodification brought about by capitalism, the growth of mass culture and its influence, the invasion of bureaucracy into private life, and changing beliefs about relationships between the sexes." (1-2) 本稿で取り上げている *The Wings of the Dove* を代表に James の作品、とくに後期の作品ではこのような視点から読み解くことができる作品が多い。*The Wings of the Dove* では「資本主義によってもたらされる市場の拡大と商品化、男女間の関係に関する考え方の変化」が該当する。消費文化、顕示的消費について James の他の作品よりも多く言及されている。Bronner の "Reading Consumer Culture" の中で「消費文化」についての記述はまさしくこの作品に該当している。

> The rise of a consumer culture and the wealth that accompanied it created cultural, social, and individual dilemmas. Wealth was power, and to show this intangible relationship, wealth was made tangible. The accumulation and display of goods expressed the power to manage people by directing production through consumption. (13)

> Therefore, the power of American wealth was obsessively turned over to the consumption of things that conveyed one's station in life or the station to which one aspired. Even those without money often neglected basic needs to seek things that offered a taste of luxury. (21)

また、これまで取り上げてきたVeblenの*The Theory of the Leisure Class*においては所有するものが単なるものではなく、言葉・記号として機能し始めたことが認識されている。

Jamesの作品を消費社会という枠組みの中で読んでいくと、Gardnerとの共有する時代性がより鮮明に見えてくる。Jamesの作品ではMme Merle、Kate Croy、Milly Theale、Charlotte Stant、Maggie Ververを始め、演技をする人物が多数登場する。彼女たちは個人をも商品化しようとする社会の中で、相手、すなわち観客の望むような形で演技を行っている。演技をすることで、本来の自己とは異なる評価がされ、価値をつけられる。但しその価値は観客にとっての付加価値である。演技者はそれを表象するものとして記号化される。Millyの場合は裕福で、係累のない、病身のアメリカ娘という記号である。そして演技者は演じる役割にふさわしい持ち物、記号としての存在にふさわしい持ち物を所有し、顕示することになる。Millyにとってはそれが真珠の首飾りであり、palazzoである。そしてその持ち物自体が所有者を表象することとなる。

資本主義のもたらした市場の拡大という点では、都市やそこに存在する歴史的価値のある建築物でさえ、投機や不動産取引の対象となっている。また本稿では検証しなかったが、男女関係に関する考え方の変化という点では、KateはDensherに自分の計画に加担させ、遂行させていくために肉体関係を持つという、非常に功利的な考え方をしている。自らの商品化と取ることができる。また交換経済の一形態をみなすことも可能である。

Jamesの作品は前期資本主義、消費文化という観点から、その読み方をさらに広げることが可能であるといえる。

註

この研究は2012年６月９日、広島大学において実施された中四国アメリカ文学会第49回大会における口頭発表に、加筆修正したものである。

引用及び参考文献

Agnew, Jean-Christophe. “A House of Fiction: Domestic Interiors and the Commodity Aesthetic” *Consuming Visions: Accumulated and Display of Goods in America 1880-1920*, ed. Simon J. Bronner (New York: Norton,

1989): 133-156

Berland, Alwyn. *Culture and conduct in the novels of Henry James.* (Cambridge: Cambridge University Press, 1981)

Bronner, Simon J. "Introduction," *Consuming Visions*: 1-13

---------- "Reading Consumer Cultures," *Consuming Visions*: 13-55

Butler, Christopher. *Modernity* (Oxford: Oxford University Press, 2010)

Edel, Leon. *Henry James, a Life.* (London: Collins, 1987)

Hughes, Clair. *Henry James and the Art of Dress* (London: Palgrave, 2001)

Gale, Robert L. *A Henry James Encyclopedia* (New York: Greenwood Press, 1989)

James, Henry. *The American Scene* (London: Hart-Davis, 1968)

---------- *The Complete Notebooks of Henry James*, ed. Leon Edel and Lyall H. Powers (New York: Oxford University Press, 1987)

---------- "Daisy Miller: A Study" (New York: Charles Scribner's Sons, 1908)

---------- *The Portrait of a Lady* (New York: Charles Scribner's Sons, 1908)

---------- *The Wings of the Dove* (New York: Charles Scribner's Sons, 1908)

---------- *Letters to Isabella Stewart Gardner*, ed. Rosella Mamoli Zorzi (London: Pushkin Press, 2009)

McCauley, Elizabeth Ann. *Gondola Days: Isabella Stewart Gardner and the Palazzo Barbaro Circle.* (Boston: Isabella Stewart Gardner Museum, 2004)

Pearson, Maeve. "Re-exposing the Jamesian Child: The Paradox of Children's Privacy" *Henry James Review* 28 (2007): 101-119

Rawlings, Peter. "Vital Illusions in The Portrait of a Lady" A *Companion to Henry James* ed. Greg W. Zacharias (West Sussex: Wiley-Blackwell, 2008)

Shand-Tucci, Douglas. *The Art of Scandal* (New York: Harper Collins Publishers, 1997)

Tanner, Tony. *Venice Desired* (Cambridge: Harvard University Press, 1992)

Tharp, Louise Hall. *Mrs. Jack: A Biography of Isabella Stewart Gardner* (New York: Congdon&Weed, Inc., 1965)

Veblen, Thorstein. *The Theory of the Leisure Class* (Oxford: Oxford University Press, 2007)